

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：56401

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12547

研究課題名（和文）キクラデス諸島の社会的ネットワーク再編による国民国家建設

研究課題名（英文）Nation-State Construction through Social Network Reorganization in the Cyclades Islands

研究代表者

松浦 真衣子 (Maiko, Matsuura)

高知工業高等専門学校・ソーシャルデザイン工学科・准教授

研究者番号：40737235

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：1990年代以降のギリシャ海事史の成果と課題を総括し、西欧中心主義を否定する新たなグローバル・ヒストリーの叙述を紹介した。この分野では、これまで周縁とされた地域が、地縁・血縁ネットワークを通じて国境を越えた「ギリシャ性」を創出していく過程が分析されている。本研究では、この「ギリシャ性」を追求するために、海事産業で発展したキクラデス諸島を調査した。具体的には島々の経済的・文化的要因から生み出された住民の語りを調査し、各島固有のアイデンティティを抽出した。今後は、各島のアイデンティティがいかに絡み合い、島民-ギリシャ人意識を融合させた「国民意識」を形成していくかを調査する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界システム論において半周縁に位置するエーゲ海の島々は、20世紀期の世界海運をけん引したギリシャ船主揺籃の地である。近年の海事史はギリシャ人が創りあげた地縁・血縁ネットワークが、国民とは異なる「ギリシャ性」を生み、ギリシャ海運を世界システムの中心に据える原動力となったことを明らかにしている。本研究ではこの「ギリシャ性」を分析するため、国民化の時代に、海運揺籃の地でいかなるアイデンティティが育成されてきたかを検討した。多様なアイデンティティは生存戦略を通じて、時に国民化に呼応し、時に反発した。本研究では地域からの国民化は戦略的に変形し、国家の意図に反して国境を越えていくことを明らかにしている。

研究成果の概要（英文）：I summarized the achievements and challenges of Greek maritime history since the 1990s and introduced the new global history which rejects Eurocentrism. In this field, it is investigated that small regions, previously considered peripheries, create a transnational "Greekness" through geo- and kinship networks. In pursuit of this "Greekness," this study examined the islands of the Cyclades, which developed through the maritime industry. In this study, I extracted the unique identity of each island from the inhabitant's narratives, which created from the economic and cultural factors of the islands. In the future, I will investigate how the identities of each island create a "national consciousness" that hybrids islander consciousness - Greek consciousness.

研究分野：近代ギリシャ史

キーワード：グローバルヒストリー 海事史 国民国家建設

1. 研究開始当初の背景

東地中海に位置するエーゲ海の島々では、16世紀以降オスマン帝国支配のもと、海運業を中心とするキリスト教商人が活躍した。彼らは正教キリスト教徒であり、同時にオスマン帝国臣民でもあった。彼らは商業語をギリシャ語として多元的な帰属意識を形成していた。近世ギリシャ商人の帰属意識の曖昧性については、地中海史研究者モーリー・グリーンにより検討されている（**Catholic Pirates and Greek Merchants: A Maritime History of the Early Modern Mediterranean, Princeton University Press, 2010**）。モーリー・グリーンによると、レパント海戦を機に、16世紀の東地中海で支配的だった世俗的秩序は後退し、宗教的秩序に移行していく。彼の著作では、この変化の中で、地中海を行き来するギリシャ商人が、可変的で曖昧な帰属性の中から戦略的に世俗的/宗教的帰属を選び取り、カトリック海賊と対峙する様子が描かれている。

この曖昧性に変化が生じるのは18世紀である。もともとエーゲ海はカトリックの宣教・海賊の侵入など、西欧との接触が盛んな地域であった。しかし、1774年キュチュク・カイナルジャ条約締結を契機にロシア介入のもと、正教キリスト教徒の船舶活動が最盛期を迎える。このような列強とのつながりの中から、エーゲ海中部に位置するキクラデス諸島はオスマン帝国の経済の中心となり、同諸島民は東地中海において商業上の特権的な地位を獲得していく。こうして、キクラデス諸島はオスマン帝国の領域を越えた商品経済のネットワークの中に組み込まれていった。以上のように18世紀は、列強の新秩序のもと東地中海の経済構造が変化していく時代である。18世紀以降に構造化された列強の新秩序とは何か、また新秩序にエーゲ海の正教キリスト教徒がいかに対応し、自らの複合的帰属性を主体的に変化させていったかを分析することが本研究の課題だった。

また、当時は一橋大学の秋山晋吾氏を研究代表者とした科研プロジェクト「近世・近代のヴラフ人の移動と集団形成に関する基礎的研究：バルカン・中欧・新大陸」（2017年-2020年）に分担者として参加していた。このプロジェクトで、バルカンの言語的マイノリティであるヴラフ人が18世紀以降、ヨーロッパ大陸を横断する広範な商業・知的ネットワークを形成していく過程を研究した。ヴラフ人の陸のネットワーク形成時期と、キクラデス諸島民の海のネットワークが拡大していく時期が重なる。この2つのネットワークの形成過程を比較することで、グローバル・ヒストリーの視点から、東地中海の島社会が列強の新秩序または国民国家体制にいかに関与していったか、または再編されなかったのかを分析することが大きなテーマとなった。

2. 研究の目的

本研究では、ギリシャ独立戦争（1821年-1830年）前後における、東地中海の島々が作り出す多様な社会集団のネットワークの再編を分析するというテーマを設定した。具体的には以下2点が研究の主要目的だった。

(1) 東地中海に浮かぶキクラデス諸島の島民が、18世紀以降の海事産業最盛期に、国境を越えた商業活動または異教の宣教師・海賊と対峙する中で、宗教・帝国・職業上の帰属性を織り交ぜながら、いかなる複合的アイデンティティを形成していったかを検討する。

(2) 18世紀末から19世紀前半にかけて、これら島民がギリシャ独立運動・国民国家形成に参加していく中で、自らの帰属性をいかに再編し、東地中海の生活圏からバルカン半島を本土とする新しい国民国家に戦略的に対応していったかを検討する。

3. 研究の方法

研究の方法として、アンドロス島、ティノス島、シロス島の3島を研究対象とした。研究の開始時は、対象をアンドロス島、ティノス島、ナクソス島としていたが以下の3点を理由として変更した。第一に、18世紀から19世紀にかけてのキクラデス諸島の政治経済の中心がシロス島であり、シロス島を介してアンドロス島ならびにティノス島の政治的・経済的ネットワークが形成されたこと、第二に、シロス島とアンドロス島が海事産業営む社会を構成していて、比較検討が可能であることが分かってきたからである。

研究対象の3島に関して、(1) 先行研究や郷土史の整理を行った。(2) 各島の文書館や博物館を訪問し、どのような史料が残っていて、どの程度整理されているか、出版された史料集はあるかを調査し、可能な限り収集した。(3) 島民の記憶の聞き取り調査を行った。特にアンドロス島では船長を輩出した家族にアクセスすることが出来た。可能な限り海運業者が創り出す島社会の記憶を聞き取った。

4. 研究成果

○ギリシャ海事史の整理

1990年代からギリシャにおいて海事史研究が活発となり、クレタ大学のイエリナ・ハラフティスの研究を発端として海運に焦点を当てた研究が増加している。特に「ギリシャ人所有」の船がつかなく世界的な輸送ネットワークの研究が発展する中で、海運をになうギリシャ人たちは海外に拠点を移したとしても出身の島の地縁・血縁・地域文化を維持し続けたことが分かってきた。しかし、国籍という面からみると商業を営む「ギリシャ人」という呼称には曖昧性が見られる。18世紀以降、海・陸に限らず徐々に世界商業の主体となったギリシャ人はオスマン帝国臣民であり、ヴェネチア臣民だった。国民国家が形成される以前から、商業上「グレキ」

つまりギリシャ人と呼ばれる人々がバルカン半島や地中海を拠点に商業ネットワークを広げていったが、そこにはヴラフ人のネットワークが含まれていたことが、一橋大学のプロジェクトで明らかになっている。

ギリシャ独立後もギリシャ人は海外に居住し外国籍を取得した。海運については、ギリシャ人所有船の多くが外国籍だった。このことから、商業上の「ギリシャ人」と国民の「ギリシャ人」ではその内容に差異があり、国民国家成立後も両者の間に緊張関係があったと言える。イエリナ・ハラフティスが「19世紀、20世紀、21世紀の海運にとって、海運を営むギリシャ人であることの重要性は、アイデンティティや文化とは別に、私が他の研究で長々と展開してきたように、国際舞台での起業家精神や経済的生存、ギリシャの国際海運・貿易ネットワークの構築と関係している」と述べるように、生存戦略としての「ギリシャ人」概念が存在し、これは出身地の地縁・血縁を軸とした相互扶助のネットワークを包括する概念であったと考えられる。

今後の課題としては、海運ネットワークが国際的に展開される中で、海運揺籃の地の社会構造がいかに変化し、それが海運業を営む「ギリシャ人」意識にどのように影響を与えていくかを各地域で分析する必要がある。また、海運を支える島の女性社会の変容は十分に分析されているとは言えない。今後は聞き取り調査を行いながら、国際社会に乗り出す人員とそれを地域で支える人員の拮抗関係についても分析する必要がある。

以上のギリシャの海事史の流れから見れば、本研究で対象としたキクラデス諸島の3島はギリシャ海運の揺籃の地であり、生存戦略的アイデンティティが顕著に表れる場所である。それぞれの島の海運の発展から、多様で戦略的な「ギリシャ性」の創出が見られるのではないかと考えた。以下、本研究で調査した郷土史や先行研究から3島の特徴をまとめる。

○アンドロス島の新社会層の闘争

アンドロス島はデメトリオス・ポレミス(1932年-2005年)、デメトリオス・パスハリス(1864年-1944年)など、著名な郷土史家を多数輩出している。本研究では郷土史をまとめ、海運業を営んでいた一族から聞き取り調査を行うことで、島の歴史がどのように語られてきたかをまとめた。18世紀末からアンドロス島では海運が盛んになった。1830年のギリシャ国家成立までの数十年間で島西部のホラ、ステニエスを中心とした海事都市が確立していった。この間に「ゲミジデス(船を所有する者)」という強力な階層が生まれ、独立戦争で戦艦を供給したことから政治的発言権を獲得していった。ギリシャ独立後はシロス島の造船所を中心にキクラデス諸島全体で海運業が発展した。特にアンドロス島の船主一族エンピリコスが蒸気船への投資に成功したことが、アンドロス島民を国際海上輸送の中心に位置付けるきっかけとなった。アンドロスの船団は地中海と北米をつなぐ航路を支配した。船主の台頭にもなつて、船員や技術師の雇用も島内の地縁・血縁を軸として拡大した。他方で、島では独立戦争以前から株式型の投資セルマギアが発展していた。商船の船長は初期費用確保のために共同出資者を募り、利益が出た場合は持株に応じて分配した。セルマギアも地縁・血縁ネットワークで形成され、海事産業以外の島民を動員する原動力の一つとなった。19世紀以降の海運の急速な発展は、ほとんどすべての島民の活動を海に向けさせ、そこから経済的、社会的発展をもたらした。郷土史家のスタマティス・カンパニスは「近年のアンドロス島の歴史は、グローバル化した海運の歴史と切っても切れない関係にある。ギリシャ国家とギリシャ社会全体は、この海運業の発展に実質的な貢献をすることなく、その恩恵を受けてきた。」と述べている。

以上の郷土史の叙述から、アンドロス島では独立戦争を契機に船主を中心とした新しい社会階層が誕生し、19世紀から20世紀にかけての島全体を海運社会に編成していったことが分かる。他方で、郷土史家デメトリオス・ポレミスが「しかし、かつての経済的繁栄を奪われたエリートたちが、長い間その名声を保ち、地方政治を支配し続けたことは事実である。」と述べるように、新社会階層と既存の支配層の間で政治上の闘争が長年続いた。この闘争の中で、海事産業層=親イギリス派、既存の支配層=親ロシア派(のちに親オットー王派)という形で列強の影響力を受けながら島の社会構造が再編されていったことが分かった。

新・旧支配層の闘争を鮮明にする、島の郷土史で頻繁に言及される事件が2つある。第一に、独立戦争中に生じたデメトリオス・パリスの反乱、第二に島の知識人が異端裁判にかけられたカイリス事件である。この2つの事件の共通点はともに既存社会への反抗である。

①デメトリオス・パリスの反乱(1822年)	時期	ギリシャ独立戦争中
農民出身のデメトリオス・パリスが独立戦争の原則を社会的平等と捉え、土地なし農民の生活を改善するために既存の支配階級に対し反乱を起こした。		
②カイリス事件	時期	ギリシャ独立戦争後
国民の教師として名声を得ていたアンドロス島の啓蒙思想家セオフィロス・カイリス(1784年-1853年)が島に孤児院を開設し、そこで啓蒙思想と神秘主義思想を融合した新宗教を教授した。カイリスはこの活動を糾弾され、国民教会から異端裁判にかけられた。カイ		

リスは信仰告白を拒否し、投獄された。

①の反乱は、既存の支配階級だけでなく同胞への略奪も伴う暴動であったが、郷土史家からは民主主義思想の表出と評価される。②の事件については、セオフィロス・カイリスは政治的には親イギリス派を代表し、新社会層から孤児院建設の資金援助も得ていた。つまり、カイリス事件は新社会層と旧支配層の政治闘争を代表する事件であり、この事件は郷土史家から国家の自由主義への不寛容として語られている。2つの事件の中心人物が既存社会への反抗のシンボルとして郷土史の中で語られるようになった経緯が島の海事産業の興隆と結びついているのではないかと推測される。今後は、アンドロス島の郷土史や住民の聞き取り調査を通じた語りと、海事産業の経済的興隆の相関関係を分析し、アンドロス島民が独自に創りあげてきた「ギリシャ性」を分析していく予定である。

○国民的巡礼地としてのティノス島

ティノス島は、2つの点で他の島とは区別される。第一に現在でも宗教的マイノリティのローマ・カトリック教徒の集落が4割を占める島であり、第二に、ギリシャ独立戦争期に奇跡のイコンが発掘され、ギリシャ建国以来の国民的巡礼地として機能してきた点である。

上記の2点から見て、ティノス島は国民宗教の闘争の場であったと特徴付けることが出来る。郷土史としてだけでなく、ギリシャ国民国家の歴史叙述の中で、ティノス島を舞台として語り継がれる2つの事件がある。

①受胎告知像の発掘（1823年）	時期	ギリシャ独立戦争中
1823年に修道女ベラギアが夢の中で聖母のお告げを受ける。聖母の指示に従い、島民とともに土の中から「受胎告知」のイコンを発掘する。このイコンは病を癒すとして、すでに始まっていたギリシャ独立戦争を支えるシンボルとなる。戦後、イコンを祀る受胎告知教会が建設され、国民宗教の巡礼地へ発展。		
②エリ号襲撃事件（1932年）	時期	第二次世界大戦初期
1940年の生神女就寝祭（8月15日）にティノス島の沖合で、巡洋艦エリ号の乗組員たちが受胎告知教会の祭りに参加していた。突然、船はイタリアの潜水艦によって魚雷攻撃を受け、沈没した。ティノス島の埠頭も祭りの最中に魚雷攻撃を受けた。これがギリシャの第二次世界大戦参戦の大きなきっかけとなった。		

①と②の事件に関して、両者とも国民国家の危機の中で起こった事件であり、愛国心を鼓舞する装置としてティノス島の受胎告知教会が機能してきた。それゆえ、ティノス島の受胎告知教会に関する叙述は、郷土史だけでなくアテネを中心としたギリシャの知識人の間でも活発に行われてきた。

1880年代以降、ギリシャ文学の中で農民生活の牧歌的なイメージを理想化する農村ロマン主義運動が活発になると、ティノス島の巡礼に注目する言説が増加する。ギリシャ歴史民族学会（1882年設立）の会員だったゲオルギオス・マザラキスはティノス島の受胎告知日の巡礼を「乱痴気騒ぎ、乱交、迷信」とエキゾチックなものとして記録している。そして、この島が「国家的な祝祭の中心」となり、地元だけのものとなる危険を回避するため、イコンの行列に音楽や大砲の伴奏をつける海軍を伴わせることを提案している。

これに対しジャーナリストのヨアニス・コンディラキスは、宗教的信心に対して侮蔑的な態度をとる学者たちを糾弾した。彼は、精神疾患患者の治癒に信仰が果たす役割に言及し、1895年の論文でティノス島を「全ギリシャから来る人々の社交場」と評価している。この「ヘレニズムの社交場」という言葉は、1975年にティノス島で配布されたパンフレットにも使用された。

フェミニストのカリロエ・パレン（1859年-1940年）はティノス島の巡礼を迷信とは捉えず、信仰が国民を「道徳化」と語っていた。1887年の地方新聞『ティノスの声』でもティノス島で3月25日（受胎告知）を祝うことが国民感情を強めることによりやく気づいた政府を祝福し、ティノス島の巡礼こそが国民道徳を高めることを主張している。

以上のように、ティノス島は神秘主義的事件から国民の巡礼地になったことで、オリエンタリズムの視点を持つ知識人からエキゾチックに語られてきた。しかし、その評価が「野蛮」であれ「道徳的」であれ、巡礼を土着から国民化することが望まれていた。国民化の議論の中に地域住民も統合されていき、ティノス島のアイデンティティが国民化されていったとみることが出来る。

本研究ではティノス島の巡礼をめぐる知識人の言説を中心に分析してきたが、今後は宗教的マイノリティとしてティノス島に居住してきたローマ・カトリック教徒が巡礼の国民化をどのように捉えていたのかを分析していく予定である。また、今日においても受胎告知教会の巡礼の主体は女性である。巡礼を通じた女性の「ギリシャ性」の形成も分析する必要がある。

○港湾都市を有するシロス島

独立戦争時にキラデス諸島には小アジア、ヒオス島、プサラ島から多くの難民が押し寄せた。多くの難民の最終的な定住地はシロス島の浜辺に新しく建設されたエルムポリスだった。この

街は最大の難民都市となり、新生ギリシャの最も重要な都市の 1 つとなった。戦争難民の出身地は伝統的に海事産業で栄えた地域であり、その後のエルムポリスの経済的・社会的特徴・文化的特徴を形成する要因となった。19 世紀半ば、全盛期のエルムポリスは、港湾都市として、東地中海、黒海、西ヨーロッパを結ぶ中継地でとなった。同時に、早い時期から、海事産業の多くの分野がこの港で発展し、エーゲ海と地中海東部の主要な海運と造船の中心地として台頭した。国民国家の産業の中央集中化のなかで、島という地理的特徴は弱点となったが、エルムポリは資本家たちの新事業参入によって急速な産業化に対応することができた。19 世紀後半には、製粉所、なめし工場、織物工場など、蒸気を動力とする工場への投資が行われた。また、蒸気船の船主たちがエルムポリスに拠点を置いたことで、その繁栄が維持された。

以上がシロス島のエルムポリスの概要だが、アンドロス島とは違い、20 世紀以降の海事産業は衰退していく。「マンチャスター」に例えられるほど産業が繁栄した島であったが、古くからの地域住民（多くはローマ・カトリック教徒）との軋轢も常に存在していた。今後は、シロス島とアンドロス島を比較する中で、船主やそれを軸とした社会構造の変化を分析し、地縁・血縁だけでなく社会階層でつながるネットワークが存在したか、もし存在しないとしたらなぜかを分析していく予定である。

○まとめ

以上が今回のプロジェクトの研究成果となる。今回の調査では①ギリシャ海事史の近年の発展と課題の明確化②研究対象となった 3 島の先行研究・郷土史・聞き取り調査を通じて、それぞれの特徴をまとめ、今後分析すべき課題を明確化した。

本調査で明らかになったことは、アンドロス島はイギリスやアメリカに多くの拠点を持つ船主・船員の島であり、郷土史の中にはギリシャ国家や既存勢力への「反抗」の語りを読み取ることが出来る。郷土史家の「ギリシャ国家とギリシャ社会全体は、この海運業の発展に実質的な貢献をすることなく、その恩恵を受けてきた。」という言葉からわかるように、島民の国家との緊張関係が近代の叙述の中で常に見られた。他方で、ティノス島では「ヘレニズムの社交場」と自称しながら、土着の巡礼の国民化を戦略的に活用し、現在ではツーリズムで栄える島となった。シロス島は、移民の街としてのアイデンティティを確立し、19 世紀初期まで国家の産業を支える中心都市として栄えた。

つまりアンドロス島 = 「船主・船員」「国家への反抗」、ティノス島 = 「宗教による国民の道徳化」、シロス島 = 「ギリシャ人移民の都市・産業化」の特徴付けをすることが出来る。今回のプロジェクトでは、この三つの特徴がそれぞれの島のアイデンティティをいかに差異化していったか、または統合していったかを分析するところまでたどり着けなかった。このテーマをさらに分析するために、本プロジェクトの活動期間に、国家建設以来 3 島で始まった国営学校の史料を収集した。国営学校の運営の中で、各地域のアイデンティティと国民化との拮抗関係が分析できると予想している。今後は学校史料をもとに、3 島の「ギリシャ性」の差異化と融合を分析して行く予定である。

(参考文献)

Κατερίνα Σεραϊδάρη "Μεγάλη η χάρη της": λατρευτικές πρακτικές και ιδεολογικές συγκρούσεις στις Κυκλάδες(Ερίννη, 2007)

Διαμαντής Μπασαντής, Άνδρος 200 Χρόνια (Νέα Διάσταση, 2021).

Δημήτριος Πασχάλης, Ιστορία της Νήσου Άνδρου (Σκληρό, 1995).

Δημήτριος Ι. Πολέμης, Ιστορία της Άνδρου (Καίρειος Βιβλιοθήκη, 1981).

Σταμάτης Καρπάνης, Διαμαντής Μπασαντής, Η Άνδρος μέσα στον Χρόνο (Gutenberg, 2012).

Jill Dubisch, In a Different Place: Pilgrimage, Gender, and Politics at a Greek Island Shrine (Princeton University Press, 1995)

Katerina Galani and Alexandra Papadopoulou ed., Greek Maritime History-From the Periphery to the Centre (Brill, 2022).

Gelina Harlaftis, A History of Greek-Owned Shipping. The Making of an International Tramp Fleet, 1830 to the present day, (Routledge,1996).

Τζελίνα Χαρλαφίτη & Κατερίνα Παπακωνσταντινίου επιμ., *Ναυτιλία των Ελλήνων 1700-1821.*

Ο αιώνας της ακμής πριν από την Επανάσταση (ΚΕΔΡΟΣ 2013).

松浦真衣子「グローバル・ヒストリーにおけるギリシア海事史研究の発展『独立行政法人国立高等専門学校機構高知工業高等専門学校学術紀要 第 69 号』(2024 年)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松浦真衣子	4. 巻 69
2. 論文標題 グローバル・ヒストリーにおけるギリシア海事史研究の発展	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 独立行政法人国立高等専門学校機構高知工業高等専門学校学術紀要	6. 最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松浦 真衣子
2. 発表標題 「ヴラフからみるギリシャのマイノリティ問題」
3. 学会等名 専門研究者会議「欧州学フォーラム2019 ヨーロッパのマイノリティとマジョリティ」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松浦 真衣子
2. 発表標題 「ギリシャの言語的少数者ヴラフから見る『民族』」
3. 学会等名 「シーズ・研究内容紹介」、高知県 産学官民連携センター ココブラ主催(招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 中欧・東欧文化事典編集委員会 編、羽場久美子 編集代表	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 866
3. 書名 中欧・東欧文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------